

数量形容詞“多い”と“少ない”の非対称性
—肯定・否定極性形容詞のスケール構造の違いに基づいて—
包雅梅（華東理工大学）

1. 問題提起

(1)が示すように数量を表す形容詞の“多い／少ない”は単独で連体修飾しにくいことがしばしば研究されてきた（仁田 1980, 寺村 1991, 今井 2012, 佐野 2016, 田中 2018, 包 2025 など）。一方で, “少ない” が連体修飾する実例は“多い” よりも多く, 比較的名詞を修飾しやすいという現象も見られる。(2)は“少ない” が連体修飾する実例である。中東 (1996), 王 (2011), 朱 (2012), 服部 (2002), 佐野 (2017) など両者の非対称性を指摘している。朱 (2012) は『朝日新聞 (1999-2001) CD-ROM』のデータで用例を収集し, “少ない” が単独で装定する例は 90 例, “多い” は 4 例あるという結果を挙げている。

- (1) a. *多い人が庭に集まっている。 (仁田 1980)
b. *そのプロジェクトには多い予算が配分された。 (今井 2012)
c. *きのう電車事故があつて, 少ない人がけがをしました。 (寺村 1991)
d. *アフリカには少ない資源がある。 (今井 2012)
- (2) a. 優先株の発行価格を高めに設定できるようにして, 少ない株数で多くの資本を注入できることにした。
b. 逆に米国企業は水に溶けない樹脂製の粒で実験していたため, 少ない水できれいに流す技術を培ってこなかったという。
c. 少ない投資で銀行業ができるため, 異業種からもインターネット専門銀行をつくって新規参入する働きが相次いでいる。 (いずれも朱 2012)

BCCWJ で検索した結果によれば, “多い” が単独で連体修飾する例がほとんど見られないのに対して, “少ない” の単独で連体修飾する例は 308 例確認された。被修飾名詞が「数」である 12 例, 「量である」12 例, 「額」である 10 例, 「数字」4 例を計算すると, 346 例ある。このように, 本発表では“多い”と“少ない”が非対称性を示す理由を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究とその問題点

中東 (1996) は比較基準を伴う場合“少しの”が用いられず, “少ない”は比較を表す意味特徴を有するのに対し“少しの”はそれを有しない。(3)を挙げ, それらはいずれも“以前よりも, 通常よりも, いつもよりも”などの比較の基準を含んだ表現である。一方, “多くの”

が比較の意味特徴を持つため、比較基準を伴っても、“多い”が装定しにくいことを指摘している。しかし、包（2025）で指摘されているように、“多い／少ない”と“多くの／少しの”による連体修飾の機能がそもそも異なるため、“少ない”が“少しの”の替わりにそれが現れない文脈で使われるため、“少ない”のほうが装定用法の例が多いと考えない。

- (3) a. 少ない量でたくましく洗う
b. 少ない煙でゴキブリを駆除
c. 少ない材料でおいしい料理をつくる
d. 少ない投資で確実な利益と事業拡大
e. 少ない緑を大切に
f. 少ない資源を無駄なく有効に活用しよう (いずれも中東 1996)

王（2011）は中東（1996）とは類似する説を提示している。(4)のような“基準値を下回る”という意味を表す場合は、“少しの”は数量詞の性質を持ち、比較基準を前提としないため、生起できず、“少ない”が用いられると説明している。

- (4) スモールビジネスにとって、少ない資本をやりくりして、ビジネスを展開して、資本を蓄積してさらなる発展を期すにはこの資本回転率を速めることがもっとも大事なことだ。 (王 2011)

“少ない”が“基準値を下回る”場合に用いられるとする点は本発表とも一致するが、“基準値を下回る”の定義をさらに明確する必要がある。つまり、“多い／少ない”はいずれも段階形容詞であり、比較基準・対象を必要とするからこそ、連体修飾しにくいと考えられてきた。ただし、“少ない”が“少しの”の代替として用いられていると考えない限り、“基準値を下回る”場合に用いられるという意味的特性が、連体修飾のしやすさとどのように関連しているかを、別の観点で検討する必要がある。

本発表では、否定極性形容詞である“少ない”が、比較基準や対象が存在しない場合でも意味を表しうることを、そしてそれが連体修飾しやすさと関係することを議論する。

3. 否定極性形容詞としての“少ない”

包（2025）は“多い／少ない”と類義語である“夥しい／わずかだ”の違いについて、類義語のほうは無段階形容詞／有界の段階形容詞であるため、比較基準や対象がなくても“夥しい／わずかだ”の意味が表せ、連体修飾時には描写的機能が働くとして述べている。“多い／少ない”の使用制限に関して、両者が同じ非有界の段階形容詞に基づいて説明している。その立場では、両者の非対称性を十分に説明することはできない。

“少ない”と“多い”の違いに関して、中島（2023）の議論は示唆的である。

中島（2023）は、位相空間論の近傍という概念を「tall-short, wide-narrow」のような極性形容詞の意味分析に応用している。その結論として、ある対象 x について定まる尺度上の点 dx を境に、尺度は否定極性形容詞の指定する半開区間 $[0, dx)$ と肯定極性形容詞の規定する半開区間 $[dx, \infty)$ に分割されるということを提示している。

そこで、否定極性の度合いとなる近傍は、どの対象に対しても点 0 の近傍になっており、常に「short, narrow」という意味を含んでいる。一方、肯定極性の度合いとなる近傍の点は、対象ごとに異なっており、それだけでは「tall, wide」という意味はなく中立的(neutral)で、基準と比べることによって、あるいは、他の肯定極性の度合いと比べることによって、初めて「tall, wide」という意味が出てくる。

本発表では、“多い／少ない”のスケール構造の違いに基づき、“少ない”がその類義語類と類似し、比較基準や対象がなくても“少ない”の意味を表す場合があること、またその意味表出は文構造に依拠するところもあることを論じる。論拠として、主に次の3点を提示する。

- (5) a. “多い”と“少ない”は連用修飾用法においても異なる性質を示す。
- b. “少ない”は連体修飾位置で自動詞の主語や他動詞の目的語の数量を直接表すことができない。
- c. “少ない”が連体修飾する名詞はいくつかの語に集中しており、現れる文にはパターンが見られる。

3.1. “多い”と“少ない”の連用修飾用法

数量詞の研究では、日本語は、連体修飾より連用修飾で先行名詞句の数量を表すのが無標である。また、数量詞の連用修飾文の成立には制限があり、“ガ格／ヲ格”以外の格では成立しにくいと指摘されている（神尾 1977、加藤 1997、羽鳥 2002、岩田 2006、など）。つまり、日本語は数量詞の連用修飾で自動詞の主語と他動詞の目的語の数量を表すのが無標である。

数量形容詞の連用修飾用法を調べた結果、“多い”と“少ない”が異なる性質を示すことが分かった。“多い”の場合は連用修飾で、自動詞の主語と他動詞の目的語の数量を表す。一方、“少ない”は連用修飾で先行名詞句の数量を表せない。

BCCWJ で“多い／少ない（語彙素、連用形）＋動詞”で検索し、“多いは 3079 例確認され、その大半は(6)のように存在と結びつく意味を表す動詞と共起している。一方、“少ない”は 56 例しかなく、そのうち 30 例は(7)のように“見積もる”と共起する例であった。

- (6) a. 寿地区には外国人が多く住んでいる。

- b. 調べてみると、その牧草地に生えていたクローバー（シロツメクサ）には、卵胞ホルモンがあまりにも多く含まれていたことがわかったのだった。
- c. 周辺は早稲田大学理工学部、戸山高校をはじめ学校が多く集まる文教地域である。
- d. 建物の内外装に石を多く使っているがすべて国産品である。（いずれも BCCWJ）

(7) 内装費は少なく見積もっても千五百万円はかかる。 (BCCWJ)

また、“少ない”も“使う”と共起する例は1例ある。(6d)と対照的に考察すると、(8)において“少ない”は先行名詞の数量を表していないのが分かる。

(8) 簡単にいえば、旧来の経済システムは豊富な人的資源を少なく使うために、少ない自然資源をふんだんに使おうとしている。

加藤（1997）はそのものの数量を存在数量と呼び、存在数量を表す数量詞を存在数量詞とし、そうでないものを一括して非存在数量詞と名付けている。非存在数量詞が連用修飾する場合、動作量を表すと指摘している。

本発表では、“多い”が存在数量詞と同様に、連用修飾用法で中立的に先行名詞句の数量を表すことができるが、“少ない”はそうした用法を持たず、「より少なく」といった相対的な意味しか表さないことを議論する。

3.2. “少ない”の連体修飾用法

“少ない”が“多い”より連体修飾する実例が多いが、連体修飾用法で被修飾名詞の数量を表すことになるかかという、そうではない。まず、“少ない”と共起する名詞を考察する。“少ない”と共起する名詞の頻度表を作ると表1になる。被修飾名詞が“時間、金額、数、量、額”である例が多いことが見られる。

被修飾名詞	例文数	割合
時間	15	4.34%
金額	13	3.76%
数	12	3.47%
量	12	3.47%
額	10	2.89%
チャンス	9	2.60%
人数	7	2.02%

力	6	1.73%
資本	6	1.73%
回数	5	1.45%
予算	5	1.45%
資金	5	1.45%
労力	5	1.45%
数字	4	1.16%
物	4	1.16%
費用	4	1.16%
負担	4	1.16%
合計	126	36.42%
その他	220	63.58%

表1 “少ない”と共起する名詞

さらに、“人数、回数、株数”などの“～数”の複合語は43例ある。“摂取量、演算量、情報量”などの“～量”の複合語は7例ある。“～額”の複合語は3例ある。同類の名詞をまとめて考察すると、被修飾名詞が“数、量、額”及びその複合語である例は100例あり、被修飾名詞がいくつか集中しているのが見られる。

また、“少ない”は(1c,d)のような被修飾名詞そのものの数量が問題にされている例に生起できない。実例を分析すると、“少ない”が自動詞の主語あるいは他動詞の目的語を修飾する例はそれぞれ9例と51例あるが、それらの文では動詞や文構造に特徴が見られる。例えば、(9a)は(1c)と異なり、削り落とされた陸地が少なかったという意味を表すのではない。(9b)も“そもそも少ししかない雪をたくさん融かした”の意味で、“少しの雪／雪を少し融かした”の意味ではない。

- (9) a. 豪雨でできた河と岩の間にある少ない陸地が削り落とされ、少数のシマウマの群れがおしくらまんじゅうしながら…
- b. 札幌で一番寒い時期である1月下旬に雨が降った。それも結構な量が降って、少ない雪をかなり融かした。(いずれもBCCWJ)

本発表では、被修飾名詞の数量はすでに確定しており、“少ない”は被修飾名詞そのものの数量を表すのではなく、その類義語類と同様に描写的に用いられていることを議論する。

3.3. “少ない”の意味表出とその文構造

“少ない”が連体修飾する例文の文構造には特徴があり、その特徴が“少ない”の意味表出につながる。

“少ない”は「少ない+N+ながら／でも」、「少ない+N+助動詞+が／けど」といった後件とは逆接的な従属節に現れることが多く、43 例あった。加えて、“多い-少ない”と同様に、“大きい-小さい”“長い-短い”でも否定極性側の“小さい”“短い”のほうがかうした構文に現れる例が多いことが確認できた。

まず、「キー：形容詞、連体形；後接：名詞+ながら」で検索し、66 例ある。そのうち、キーが“短い”のは 9 例あり一番多く、“小さい”のは 7 例あり 2 番目多い。その次は“少ない”で 4 例ある。その例を(10)で示している。それに対し、キーが“長い／大きい”である例はない。

(10) a. 少ない出番ながら好印象を与えた。

b. その熱意が買われ、小さい役ながらも子役とリポーター役を二役もらえた。

c. 短い時間ながら話を聞いてくれた。 (いずれも BCCWJ)

また、BCCWJで「キー：形容詞-連体形；後接：名詞+で+も」で検索し、合計 710 例ある。そのうち、キーが“小さい”である例は 41 例で、2 番目に多い。キーが“短い”である例は 34 例で、4 番目に多い。“少ない”のほうは 28 例ある。

それから、「少ない+N+ {だ／だった／です／でした／である} + {が／けど}」と「少ない+N+では+アル+が」のような逆接する例も 11 例見られる。そこで、「キー：形容詞（連体形）；後接：名詞+助動詞+助詞-接続助詞-けど・が(書字形出現形)」及び「キー：{小さい／大きい／短い／長い}（語彙素）+N+で+は+アル（語彙素読み）」で検索を行った。その結果を表 2 でまとめて示している。

	キー+N+ながら			キー+N+でも			キー+N+助動詞+が・けど キー+N+では+アル+が		
キー	少ない	小さい	短い	少ない	小さい	短い	少ない	小さい	短い
例文数	4	7	9	28	39	31	11	26	47
キー		大きい	長い		大きい	長い		大きい	長い
例文数		0	0		7	6		5	20

表 2 逆接構文に現れる用例数

さらに、“少ない”が単独で装定する例のうち、(11)のような「少ない+N+で～」という構文が 114 文で一番多い。そのうち、後接文脈は「動詞可能形／～ことができる／～こ

とが可能である」を含む例は 40 例ある。それらの文は前件と後件とは対照的になり、前述の逆接タイプの文とは類似すると考えられる。

(11) a. 2B 鉛筆は少ない力で濃い字が書ける。

b. 少ない材料で大きな水圧に耐えることができる合理的な形だ。

c. 少ない宣伝広告費で顧客に認知してもらうことが可能となるからだ。

(いずれも BCCWJ)

このように、“少ない”が後件とは意味的に逆接関係をなす従属節に現れやすい傾向がある。本発表では、この構文的特性が“少ない”の意味表出と深く関係していると考ええる。

つまり、否定極性形容詞である“少ない”の度合いとなる近傍は、いずれの対象に対しても点 0 の近傍になり、それ自体だけでも“少ない”という意味を表しうる。この場合、“少ない”は被修飾名詞そのものの数量を表すのではなく、類義語類と同様に描写的な機能を果たしていると考えられる。さらに、“少ない”が連体修飾する文に見られる構文的特徴が、“少ない”の意味表出を支える要因である。

参考文献

今井忍 (2012) 「なぜ「多い学生」「少ない本」と言えないのかー＜存在＞の意味成分に基づく再検討ー」『日本語・日本文化』38 : 53-80.

岩田一成 (2006) 「日本語数量詞の諸相: 数量詞の位置と意味の関係を中心に」博士論文 大阪大学.

加藤重広 (1997) 「日本語の連体数量詞と遊離数量詞の分析」『富山大学人文学部紀要』(26) :31-64.

神尾昭雄 (1977) 「数量詞のシンタックスー日本語の変形をめぐる論議への一資料ー」『言語』6.9: 83-91. 大修館書店.

佐野由紀子 (2016) 「多い」の使用条件について」『日本語文法』16 巻 2 号, pp.77-93, 日本語文法学会.

佐野由紀子 (2017) 「多寡を表す形容詞と存在表現について」『語彙論的統語論の新展開』pp.33-45, くろしお出版.

中東靖恵 (1996) 「不定数量形容詞「多い」「少ない」の意味論的・統語論的考察」『ことばの研究 8』 pp.54-67.

中島信夫 (2023) 「位相空間における形容詞の意味 I—極性形容詞 (polar adjective) の場合—」『甲南大学紀要 文学編』第 173 号, 73-80.

田中秀毅 (2018) 「「多い」の装定用法と述定用法について」『摂大人文学』25, pp.51-73, 摂南大学.

- 寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお.
- 仁田義雄（1980）『語彙論的統語論』明治書院.
- 羽鳥百合子（2002）「日本語の数量詞遊離—用例にみる機能的特性」『川村学園女子大学研究紀要』13-1.13-32.
- 服部匡（2002）「多寡を表す述語の特性について」『日本語学と言語学』pp.61-74,明治書院.
- 王淑琴（2011）「A-い」と「A-くの」の名詞修飾用法の特徴」『政大日本研究』第八号,pp.69-97, 国立政治大学.
- 朱鵬霄（2012）「日本語の『多寡形容詞』の統語的特徴の分析—コーパスに基づく実証的研究—」『日語学習与研究』5,pp.8-15.
- 包雅梅（2025）『現代日本語の数量を表す形容詞の研究』ひつじ書房.

謝辞

本研究は、中央高校基本科研業務費専項資金（the Fundamental Research Funds for the Central Universities）JKS02242205（受給者：包雅梅）の財政支援を受けたものです。